



営農情報

第39号 平成27年9月3日

「あまおう」9月の管理

南筑後普及指導センター

福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5 t 以上を目指しましょう

☆ 10月初旬で、最大葉（縦） 8 cm 程度の生育を目安に

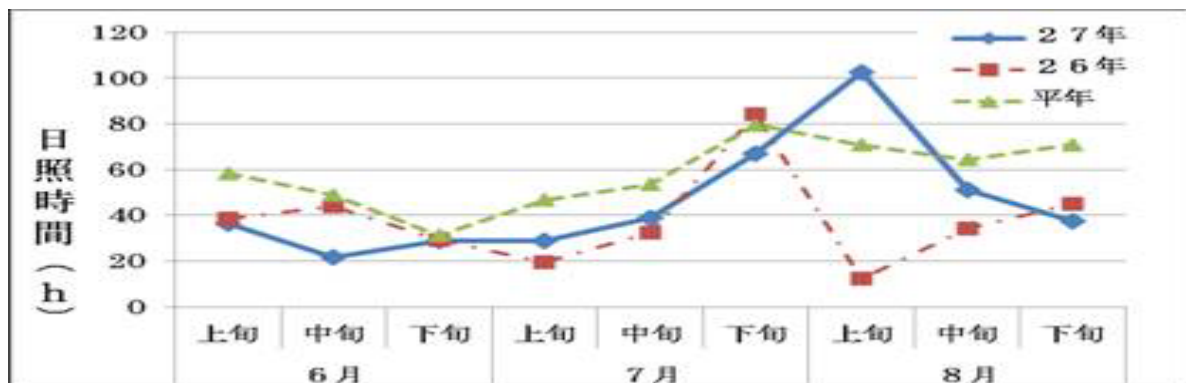
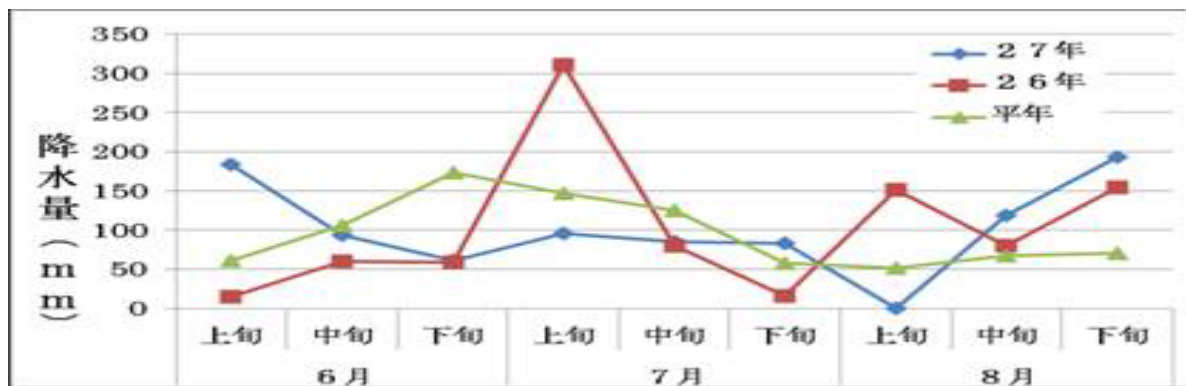
【栽培管理のポイント】

- ・充実した苗の確保
- ・花芽分化確認後の適期定植
- ・ほ場の排水対策
- ・2番果房分化促進のための寒冷紗被覆（早期作型）

6、7月の日照不足等で苗が徒長し、一部根傷みの発生が見られましたが、8月から天気も良くなり、根も回復して充実した苗に仕上がっています。全体的には概ね順調ですが、早くから肥料が切れているところが見受けられます。普通ポットでは、定期的に液肥等で追肥を行って下さい。

病害虫では、8月上旬の高温乾燥により、「アブラムシ類」や「ハダニ類」の発生が見受けられます。また、「炭そ病」も散見されます。病害虫を本ほに持ち込まないように、発病株の早期発見・早期除去並びに防除の徹底に努めて下さい。

<6～8月の降水量と日照時間(アメダスデータ久留米より)>



育苗管理(普通ポット)

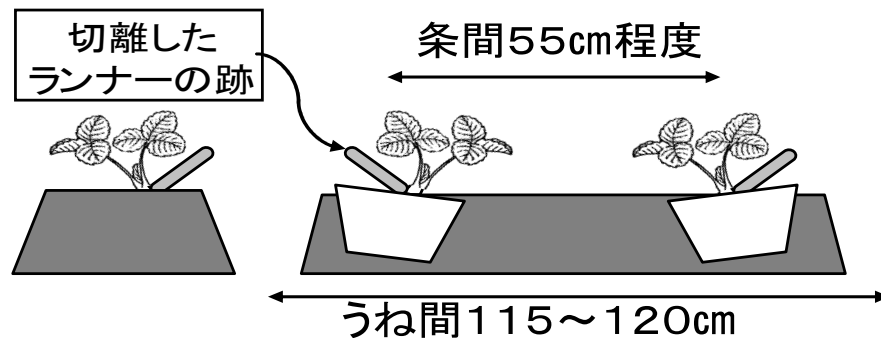
- 体内窒素が切れているところがあります。定植前に草勢が落ち込むと早進株の発生が多くなりやすいので、生育状況を見ながら、既に肥料が切れているほ場では液肥等で追肥を行う。
- 根張りが悪い(根傷み・根量不足)場合は、回復するまで葉面散布(OKF-1 1,000倍、メリット青 500倍など)を2~3回行う。

定植

- まだ本田準備ができていないほ場では、早めに準備を行う
- 畝を作った後は、定植までビニル被覆(べたかけ)を行う。
- 早い作型ほど高温時の定植になるので、活着促進・根傷み防止のために、定植前に寒冷紗を被覆し地温を下げる。
- 条間は55cmを目安にし、狭くならないように注意する。
- 株間は、土耕栽培で25cm、高設栽培で20~23cmを目安にする。
- 定植前には必ず花芽検鏡を行い、最適な花芽分化ステージになってから定植する。早い花芽分化ステージでの定植は、生育が旺盛になり出蕾の不揃いや乱形果の発生及び2番果房の分化の遅れの原因となる。特に、早期作型では厳守する。
- 深植えは、生育不良になりやすいため注意する。
- 果梗は、クラウンの傾いた方向に伸びやすいので、果実を成らせる方向に苗をやや傾けて定植する。

＜定植日と花芽分化程度の目安＞

定植日	花芽分化程度
9月10~14日	分化~ <u>ガク片形成</u>
9月15~18日	分化~ <u>ガク片形成</u>
9月19~22日	分化
9月23日~	肥厚後期



定植後の管理

● 寒冷紗被覆

- 定植後の活着促進のため、早朝に心葉から溢液が出るまで、7~10日間程度被覆を行う。ただし、曇雨天などが続く場合は軟弱徒長の原因となるので、早めに除去する。

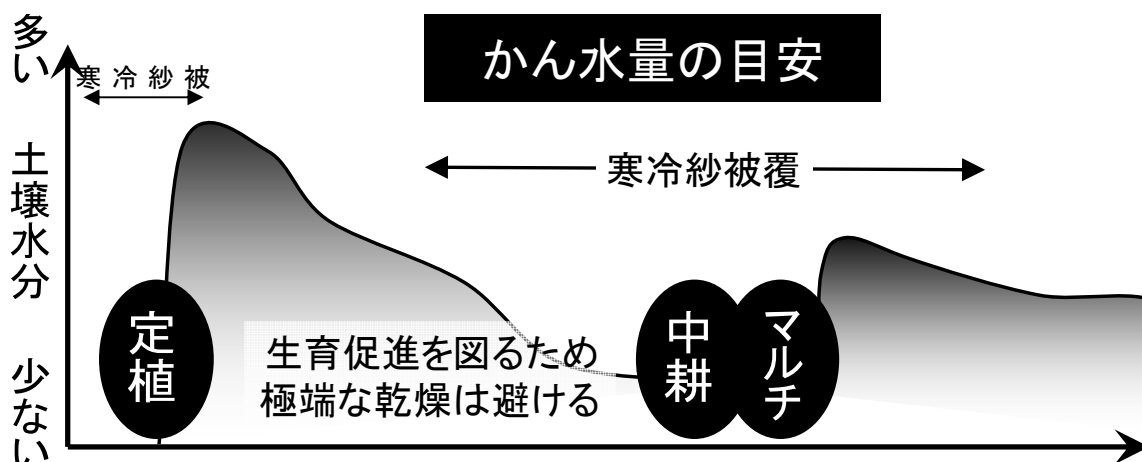
＜ 寒冷紗の種類と遮光率 ＞

種類	遮光率
シルバー寒冷紗109番	39%程度
黒寒冷紗600番	51%程度
黒寒冷紗610番	58%程度

(裏面へつづく)

● かん水

- 定植直後は、活着まで畝の表面が乾燥しないように充分かん水を行う。
- 一次根の発生を促進するため、クラウン部が常に湿るように頭上からの散水を少量多回数で行う。



● 2番果房分化対策

作型によって2番果房の連続性が異なるため、各作型に応じた対策を行う。

◆ 早期作型の場合（株が旺盛になりやすく、2番果房が遅れやすい）

- ・基肥量の削減や速効性肥料の使用抑制で、活着後の肥効を抑える。
- ・活着後は、勢いをつけすぎないように徐々にかん水を控える。ただし、極端に乾燥させすぎると生育が遅れるので、土壌水分を見ながら適宜行う。
- ・寒冷紗被覆を行うと、1番花房の出蕾が遅れず2番花房の分化促進が期待できる。
(被覆時期の目安：9月25日頃から10月20日頃まで)
- ・追肥は、2番花房の花芽分化を確認してから行う。
- ・マルチ被覆後は、地温抑制のためマルチの裾を畝の肩まで上げておく。

【寒冷紗被覆時の注意点】

- ・ほ場が乾きにくくなるため、過湿にならないようかん水の回数とかん水量を調整する。
- ・天候によっては軟弱徒長しやすいため、通気性を確保し「うどんこ病」の予防防除を徹底する。

◆ 普通ポットの場合（2番果房が続きやすい）

- ・活着後は、かん水制限などによる生育抑制や寒冷紗被覆は行わない
- ・活着不良などで生育が悪い場合、葉面散布での施肥やマルチ・ビニル被覆時期を早めるなどで、生育促進に努める。

病虫害防除

害虫は発生初期の防除、病気は発生前の予防散布が重要である。
定植後の薬剤散布は、苗が活着してから始める。

● 炭そ病

- 発病した苗は育苗床から除去し、周辺の苗も罹病の可能性があるので、できるだけ使用しない。
- 定期的な予防散布を徹底する。

● うどんこ病

- 定植後からビニル被覆まで、定期的に予防散布を行う。
- 軟弱徒長気味に生育すると発病・拡大しやすくなり、寒冷紗を被覆した場合は、軟弱徒長しやすくなるため特に注意する。

● アブラムシ

- ほ場周辺の雑草を除去する。
- 発生初期からの防除を徹底する。

● ハスモンヨトウ・オオタバコガ

- 発生初期の若齢幼虫時(体長1cm程度まで)の防除が重要である。
- 大豆畑周辺のほ場では、特に周辺からの飛込みが多いので注意する。

● ハダニ類

- 高温(25~30℃)ほど増殖力が高い。
- ナミハダニはイチゴ苗上で生活する(ほ場周辺からの侵入はほとんど無い)葉の裏に生息しているため、葉数が多くなれば薬剤がかかりにくくなる。
そのため、定植後の下葉除去後及びマルチ被覆直後は、特にしっかりと防除する。
- 天敵のチリカブリダニを使用する場合は、影響が長い農薬の使用を避ける。

防除のポイント①: 育苗期からの持ち込みを防ぐ

- ・ 定植前の徹底防除が必要である
- ・ 展着剤を加用して、薬剤の散布ムラを改善する

防除のポイント②: ほ場内でナミハダニを増やさない

- ・ ほ場内に持ち込まれたわずかなナミハダニを、厳寒期(2月)までに徹底し防除する。
- ・ ナミハダニが増えやすい時期(10月中旬、11月下旬~12月上旬、1月下旬、2月下旬、)に重点防除をする

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!